生誕100年記念特集

魂の俳人 村越化石

本市出身の俳人・村越化石は大正11年（1922）12月に生まれ、今年生誕100年を迎えます。生命の力強さを詠み続け、数々の賞を受賞した村越化石を紹介します。

問街道・文化課　☎643・3036

化石のインタビューを収録した動画

生ひ立ちは 誰も健やか龍の玉

この句は村越化石が生家にも自生していたジャノヒゲの実（龍の玉）を手に取って遊んだ記憶をもとに詠んだ句です。

村越化石（本名：英彦）は大正11年12月17日、志太郡朝比奈村（現・藤枝市岡部町）に生まれました。

昭和13年、旧制志太中学校4年（現・藤枝東高校1年）の時、ハンセン病が見つかり中学校を中退します。当時、ハンセン病は不治の病であり、その特徴から差別と偏見を伴って恐れられていました。ハンセン病と宣告された場合、治療の名のもと、人知れず故郷を離れ、隠れ住むことが、当時の人たちがたどる道でした。

まだ16歳だった化石はハンセン病について知らされることなく、両親から家を出て東京で治療に専念するよう言われます。嫌がる化石に、母・起里は、「行かぬなら私と一緒に死んでくれますか」と諭したといいます。子にそう告げなければならなかった母の言葉は重く、そして深いものでした。

癩人の相争へり 枯木に日

故郷を離れた化石は、東京のいわゆる「病人宿」で治療を受けます。この頃、療友の勧めで俳句に出会いました。

その後、群馬県の草津温泉にあった湯ノ沢地区の病人宿に移り、地元の俳句仲間との交流が始まります。また、妻となる奈美とも出会いました。

同じ頃、新聞の地方版に投句を始めます。故郷に帰ることも世の中に出て暮らすこともできず、生きながら土の中に埋もれた石と同じという思いで「化石」という俳号をつけました。

人の死を うらやみすする寒卵

湯ノ沢地区の病人宿が解散になると、化石は昭和16年12月、栗生楽泉園に入園。終戦前後は物資や食料が不足し、療養する人たちも病気の体を押して山を開墾し作物を作りました。医薬品も不足し、多くの人が苦しんで亡くなっていくのを見て、死を覚悟しながら句作を続けていました。

生き堪へて 七夕の文字太く書く

昭和18年、アメリカでハンセン病の特効薬「プロミン」が開発され、長らく不治の病とされていたハンセン病が治る病気となりました。日本でプロミンの治療が始まったのは戦後のことです。昭和24年頃、化石もプロミンによる治療を受け始めました。

その後もプロミンの副作用や病気の重い後遺症がありましたが、化石は病気が治ることを喜び、治る以上は俳句を自分の生きがいにすることを決意します。

除夜の湯に 肌触れあへり生くるべし

化石が初めて大野林火の俳句に触れたのは昭和24年。林火の「冬雁に水を打つたるごとき夜空」という句に感銘を受けた化石は、林火の主宰する俳誌『濱』に入会します。当初は病気を隠し、匿名での投句でした。

翌年、化石は自らの病気を明かし、園の俳句会「高原俳句会」の指導を依頼することを決意します。もし断られたら濱を辞めることも考えていましたが、林火はこの申し出を快く受け入れます。

松虫草 今生や師と吹かれゆく

林火が初めて楽泉園を訪れたのは昭和26年4月。林火は「皆さんは不幸な病気で肉体を病んでいるが、心まで病んでいるわけではない。その心を澄ませて俳句を詠みなさい」と語りかけました。林火との出会いは、化石の句作の大きな転機となりました。

寒餅や最後の癩の詩 つよかれ

昭和30年、化石はプロミンの副作用で片目の視力を失います。深い悲しみの中で、心のよりどころとなったのが俳句でした。

1922	大正11年12月	17日、志太郡朝比奈村で誕生
1938	昭和13年	16歳でハンセン病を宣告され、離郷
1941	昭和16年11月 12月	奈美と結婚 国立療養所栗生楽泉園に入園
1943	昭和18年	本田一杉の指導を受ける 園の「栗の花句会」（後の高原俳句会）に属し、俳句精神を学ぶ
1949	昭和24年６月	大野林火主宰の俳誌『濱』に、境遇を隠したまま初投句
1955	昭和30年	片目の光を失う
1962	昭和37年８月	第１句集『獨眼』刊行
1970	昭和45年11月	失明する
1974	昭和49年８月	第２句集『山國抄』刊行。俳人協会賞受賞
1982	昭和57年６月 ８月	第３句集『端坐』刊行 大野林火死去
1983	昭和58年７月	第17回蛇笏賞受賞
1988	昭和63年５月	第４句集『筒鳥』刊行
1989	平成元年５月	第４回詩歌文学館賞受賞
1990	平成２年10月	第27回点字毎日文化賞受賞
1991	平成３年11月	紫綬褒章受章
1992	平成４年12月	第５句集『石と杖』刊行
1997	平成９年７月	第６句集『八十八夜』刊行
2002	平成14年11月	岡部町に帰郷。村越化石句碑除幕
2003	平成15年10月	第７句集『蛍袋』刊行
2007	平成19年８月	第８句集『八十路』刊行
2008	平成20年２月	第８回山本健吉賞受賞
2010	平成22年10月	第９句集『団扇』刊行
2013	平成25年４月	卒寿記念 自選句集『籠枕』刊行
2014	平成26年３月	８日、91歳で没。

文学館では、村越化石の生い立ちや句集などを常設展示しています。また、化石の句集は、市立図書館などで閲覧できます。
※館によって所蔵資料が異なります。

ハンセン病は「癩」と呼ばれ、過去さまざまな偏見を伴い、患者やその家族の尊厳を傷つけてきました。本紙では、固有名詞や資料を引用する場合など、必要最小限の範囲で使用しています。

楽泉園内を散歩する化石

化石の故郷・岡部の朝比奈川

関森勝夫さん
大野林火に師事。俳誌『蜻蛉』主宰。
静岡県立大学名誉教授。

蓑虫と息合はすごと暮らすなり

化石は俳人格を持った数少ない俳人でした。俳人格というのは、俳句でできた人格ということで、生活そのものが俳句になっている人を指す言葉です。化石は世の中から隔離され、死と隣り合わせの生活の中で、死から生を眺め、自らが生きた証として俳句を詠みました。そんな俳句だったからこそ、人々に勇気を与えているのだと思います。

化石は自らの境遇を恨むようなことはなく、辛い、苦しい、といった俳句は作りませんでした。その人間性の根本は故郷の母により育まれたのだと思います。

作者の背景や思いを知ることで、その俳句の深さを味わうことができます。ぜひ、化石の人生に思いを寄せてみてください。

花火の夜
母の膝にて寝入りたる

望郷の
柿食ふ口中(こうちゅう)まで
入日(いりひ)

師と逢ひてすすきに
初穂生れけり

故里につながる
蜜柑ころがれり

花好きは
母ゆづりなり菊根分け

茶の花を心に灯し
帰郷せり

とんぼ来て
とまれや杖に
また石に

母なき川
曼珠沙華(まんじゅしゃげ)なと
流れ来よ

た。そして、自分たちの代でこの病気を終わりにしたいという強い思いをもって句作に打ち込みます。

もの蒼(あお)む梅雨や片眼を失くし佇(たた)つ

昭和37年、化石は初めての句集『獨眼(どくがん)』を刊行します。その際、実家に迷惑をかけてはいけないと、母に手紙を出しました。母からは「今度句集を出してもらえる様になった由、結構です。大いに張り切ってやってください。（中略）色々家に迷惑とかいう点は心置きなくやってください。別に尊い人生を世間に秘している訳でなし、よい事をやってくれるのでしたら却って誇りにもなるくらいです。どうぞご心配なく」と返信が来ました。

しかし、その母は句集の完成を待たず、昭和37年6月に亡くなってしまいます。

蟹走り喪のわれ何処へゆかむとす

化石は母の訃報を聞くと、どうしていいか分からず、林の中に入って泣きました。母の存在は化石にとって、世の中との唯一のつながりであり、心の支えでした。そんな中でも、化石は帰郷することができませんでした。その後も母を思う気持ちは深まっていきました。

天が下雨垂れ石の涼しけれ

昭和45年、化石は完全に失明しました。このときも、化石はかつて指導を受けた本田一杉(いっさん)の「肉眼は物を見る、心眼は仏を見る、俳句は心眼あるところに生ず」という言葉を支えに句作に励み続けました。このような状況で詠まれた「天が下…」の句を、林火は無欲の境地と評し、「化石にはかなわない」ともらしたと言います。

昭和49年に第2句集『山國抄(やまぐにしょう)』を刊行し、俳人協会賞を受賞、昭和57年に第3句集『端坐(たんざ)』を刊行し、翌年、俳句界で最も権威ある賞と言われる蛇笏賞(だこつしょう)を受賞しました。平成3年には紫綬褒章(しじゅほうしょう)を受章しています。

これからの長夜無明(むみょう)の身の置き処

昭和57年、生涯の師と仰いだ大野林火が亡くなります。林火は高原俳句会で指導する際に「心に曇りガラスを張らずに、澄んだ心で俳句を作りなさい」と語ってきました。化石はその言葉を生涯大切にしました。

望郷の目覚む八十八夜かな

化石は「望郷の句は私には多い。故郷を離れてすでに久しく、見えない眼の奥にいつも故郷がある」と語ってきました。

多くの賞を受賞し、俳句界では非常に有名な俳人でしたが、出身地を明かしていなかったことから、当時、出身地である岡部町で化石を知る人はほとんどいませんでした。

平成12年、化石が岡部町出身であることを知った当時の町長と教育長は、化石の俳句に感銘を受け、功績を後世に伝えるため、句碑の建立と俳句大会の開催に向け実行委員会を立ち上げました。そして、平成14年、多くの人の協力により、玉露の里に句碑が建立されました。

化石は、句碑の建立と、その除幕式に合わせて帰郷することを岡部町から依頼されたとき「皆さんに迷惑を掛けるわけにはいかない」と固辞しました。しかし、姉や妻などに説得され、除幕式に合わせた帰郷がかないました。

60年ぶりの帰郷。化石は故郷で友人など多くの人から温かい歓迎を受けました。朝比奈川を渡る橋から化石の生家までの道に、地区の住民100人以上が並び、手を振って迎えました。

化石は生家の間取りをしっかり覚えており、目が見えなくとも誰の手も借りず仏壇の前まで進み、手を合わせました。

吾(われ)を迎ふ拍手あたたか冬紅葉

翌日、句碑の除幕式が行われ、化石が本名の村越英彦を名乗って挨拶をすると、会場は温かい拍手に包まれました。

句碑の作者は、市内在住の石彫家・杉村孝さん。形は子どもを抱く母をイメージして作られました。

杉村さんは化石の句に合う石を探すため、神奈川県真鶴町まで足を運びました。また、句碑には目の見えない人でも読むことができるよう、点字が添えて

◀林火が楽泉園を訪れた際に指導した内容を録音したテープを、何度も聞いていた化石

大野林火（明治37年～昭和57年）
第３代俳人協会会長。
俳誌『濱』主宰。

榊原陸一さん
村越化石俳句顕彰会元会長
元岡部町教育長

闕うて鷹の忘ぐりし深雪なり

化石は人格的にも優れた人で、謙虚な人でした。自慢や愚痴を言わず、師の大野林火への感謝をよく口にしていました。「大野林火なくしては私の命はない。私は俳句があったから生きることができた」と語っていました。辛い境遇にあっても化石は俳句を心の柱にしていました。その根底にあったのは、朝比奈の自然であり、ご両親であったと思います。人間を育むには、子どもの頃から地域の自然や文化・芸術に触れ合うことが大切です。藤枝の子どもたちが、化石が人生をかけた俳句に親しみ、地域の中で俳句を作ることで心豊かに育って欲しいと思います。

▲榊原さんが化石から根分けしてもらい、今年の生誕100年に合わせるようによく咲いた菊

▲楽泉園内の化石の部屋（平成21年撮影）

▲化石の自筆ノート（三浦晴子さん所蔵）

あります。目が見えず手足の感覚もなかった化石が、唯一感覚が残っていた舌で点字をなぞると、感涙する人が多かったといいます。

よき里によき人ら住み　茶が咲けり

平成14年に帰郷した折に、化石は13句の俳句を詠みました。決して忘れることがなかった故郷の地に立ち、温かな歓迎を受け、心の底からの安堵感と感謝の気持ちを表した句でした。これまでの化石一人の心の故郷が、人々とともに分かちあえる、愛する故郷となりました。

初一念（しょいちねん）　通す芒（すすき）の初穂かな

化石は楽泉園に帰った後も、精力的に句作を続けました。

平成19年に第7句集『蛍袋（ほたるぶくろ）』、平成15年に第8句集『八十路（やそじ）』（山本健吉文学賞）、平成22年に第9句集『団扇（うちわ）』を刊行。平成25年には卒寿を記念して、自選句集『籠枕（かごまくら）』を刊行しました。

化石は、その後も句作を続け、平成26年3月に楽泉園の病棟で亡くなりました。91歳でした。

精一杯生きて悔いなし　弥生尽（やよいじん）

この度、化石の直筆ノートなどが見つかりました。新たに見つかったのは、『濱』などに掲載された自らの俳句を抜き出して書き留めた抜句集や、化石が生活の糧としていた菊の栽培方法をメモしたノートなどです。抜句集は自選句集『籠枕』を編む際にも使ったといいます。化石と家族ぐるみのつきあいがあった、三浦晴子さんが、化石の死後、妻の奈美から預かって欲しいと頼まれたものでした。

今回見つかった資料は、令和5年1月に開催する企画展で展示します。

「自然に学んでごらん」

「故郷の自然の良さを子どもたちに感じてもらえば、きっといい世の中になる」、化石は、故郷の子どもたちにこの言葉を残しました。

平成15年に始まった村越化石俳句大会は、化石と旧岡部町教育委員会の思いが一致して始まり、今年で18回目を迎えました。毎年3千句もの応募が寄せられ、化石の思いが継承されています。

今年度、生誕100年の記念事業として、記念講演会や吟行句会などを開催し多くの人たちが参加しました。また、1月には文学館で企画展を開催します。

市では今後も化石の顕彰を通して、子どもたちに俳句など文化・芸術の魅力を広め、化石の愛した郷土の自然や文化を後世に伝えていきます。

望郷の目覚む八十八夜かな

句碑は今も玉露の里に静かに佇み、化石の愛した故郷を見守っている。

三浦晴子さん
湧同人・俳人協会静岡県支部常任理事

山眠り火種のごとく妻が居り

化石先生は無心、無欲で、優しく、人の心を大切にされる方でした。ご自身の病気については話そうとせず、「こんな苦しい病気は自分一人で沢山だ。他の誰一人として、こんな思いをして欲しくないんだよ。」「私は、読んでくれた人の心が安らぎ、少しでも力づけられるような俳句が作れたらいいと思っているんだよ。」と言われました。今回展示する化石先生の自筆ノートを故郷の皆さんにご覧いただきたいと思います。

▲式典で挨拶する化石

第18回村越化石俳句大会受賞者決定

3434句の応募があり、左の通り各賞を決定しました。（敬称略）

【村越化石賞】

小学生の部

山下蒼馬（藤枝中央小1年）
「おにやんまかわのまわりを　ぱとろーる」

石塚文人（青島北小6年）
「夕焼けに向かって走る　今日は塾」

一般の部

古賀勇理央（愛知県尾張旭市）
「読初の「端坐」に父の　朱線かな」

大島壮太（青島中1年）
「夏休みさわりたくない　文房具」

【市長賞】

石田あいな（藤枝中3年）
「つばめの子旅立つ前に　おしずもう」

小沼勇斗（附属島田中1年）
「テントからもれる灯火　笑い声」

英龍子（神奈川県横浜市）
「潮の音の緑蔭けふの　書斎とす」

山田乙華（藤枝中2年）
「どこまでもはじけず漂う　シャボン玉」

山村葉琉（葉梨中3年）
「もの干しにせみの脱殻　よくかわく」

【入賞】

小・中学生の部

丹羽健心（西益津小2年）
「夏休みアサギマダラが　たびしてる」

曽原百合子（高洲小3年）
「ひこうきがにゅうどう雲に　さらわれた」

一般の部

塚本治彦（神奈川県茅ヶ崎市）
鷲頭シズ子（千葉県市原市）
山田眞二（浜松市東区）
神戸良夫（五十海）
森悦子（石川県白山市）
山田泰久（浜松市中区）
杉浦早苗（神奈川県横浜市）

賞をもらって飛び上がるくらい嬉しかったです。

グラウンドに遊びに行ったとき、近くの川でトンボがぐるぐる回っているのがパトロールみたいだと思って作りました。これからも俳句を作っていきたいです。

山下蒼馬さん

俳句好きの祖母に、村越化石が病気の中で俳句を詠んでいたと聞き、強い人だな、と思っていました。

普段から外の風景を見たり写真を撮ったりするのが好きで、俳句を作ることで、それを言葉にできることが分かりました。これからも色々なことを言葉にしていきたいと思います。

石田あいなさん

生誕100年記念 文学館企画展

魂の俳人 村越化石展

化石の直筆ノートや自作句集、俳誌『濱』などを展示し、化石の業績を紹介します。

▼**とき**／令和5年1月5日㈭～29日㈰　▼**ところ**／郷土博物館・文学館　▼**入館料**／200円（中学生以下無料）

㊐郷土博物館・文学館　☎645・1100

参考文献　栗林浩「生くるべし―魂の俳人・村越化石」（『俳句界』2006年4月号　98-109頁）
栗林浩「スペシャルインタビュー 村越化石」（『俳句界』2005年11月号　16-23頁）
『大龍勢 魂の俳人 村越化石句碑建立記念集』（2003年3月30日）
村越化石『自選句集 籠枕』（2013年4月24日）